

ZENBI

全国美術館会議機関誌

September 2019 [Vol.16]

Sept. 2019



私たち加島美術は美術商として欠かせない「真美眼」と「審美眼」を研ぎ澄まし、日本美術の国内外への普及と発展のために尽力しております。そのフィールドは由緒ある古美術から新進気鋭の現代作家まで、日本美術の多岐のジャンルに及びます。

1F 展示スペースはモダンな内装で作品を展示しており、従来の日本美術のイメージにとらわれない、現代的な空間での日本美術の楽しみ方を提案しております。ギャラリー2Fには本格的な茶室があり、こちらでは和室の中における作品の佇まいも堪能することが出来ます。

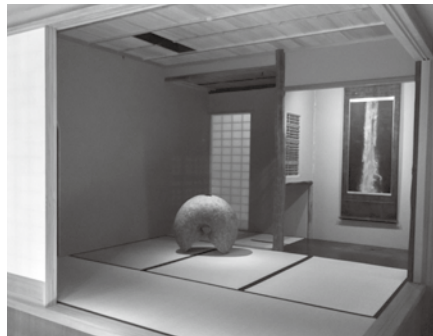
年に2回開催される日本美術展示販売会「美祭-BISAI-」や、一般の方の美術品の売買を仲介する入札会、その他企画展も随時開催しており、優れた作家の再評価に繋がると共に、日本美術を広く多くの方に楽しんで頂けるよう努めております。どうぞお気軽にギャラリーまで足をお運びください。



加島美術

株式会社 加島美術

〒104-0031
東京都中央区京橋3-3-2
tel:03-3276-0700
fax:03-3276-0701
mail:info@kashima-arts.co.jp



CONTENTS

ブロック報告

- 2 〔北海道〕 新たな連携とそれぞれのupdate 佐藤友哉
- 4 〔東北〕 地域に根差した地方美術館の活動 平澤 広
- 6 〔関東〕 繋がる、継承、美術への旅 末崎真澄
- 8 〔東京〕 浮世絵に関する展覧会の動向について 日野原健司
- 10 〔北信越〕 芸術祭以降—美術館の空間を読み解く 荒井直美
- 12 〔東海〕 閉館、休館はあるけれど 速水 豊
- 14 〔近畿〕 二つのニュー・ウェイブ 中谷至宏
- 16 〔中国〕 ミュージアムを振り返りつつ考えること 赤井あずみ
- 18 〔四国〕 四国は一つ 江川佳秀
- 20 〔九州〕 インバウンドとコレクション ラワンチャイケン寿子

新規正会員紹介

- 22 ——— 国立アイヌ民族博物館設立準備室
- 23 ——— 太田市美術館・図書館
- 24 ——— 川口市立アートギャラリー・アトリア
- 25 ——— 清里フォトアートミュージアム
- 26 ——— たましん歴史・美術館
- 27 ——— 上原美術館
- 28 ——— 絹谷幸二 天空美術館
- 29 ——— 奥田元宋・小由女美術館

賛助会員各社 30

事務局から 31

編集後記 33

投稿要領 34

ZENBI 全国美術館会議機関誌 投稿規定 35

ZENBI 全国美術館会議機関誌 Vol.16 2019年9月1日発行 ©全国美術館会議

〔編集〕全国美術館会議機関誌部会 幹事 尾崎信一郎 青山杏子

〔発行者〕全国美術館会議 〒110-0007 東京都台東区上野公園7-7 国立西洋美術館内 TEL 03-3828-0290

〔デザイン〕宮谷一款(日本写真印刷コミュニケーションズ) 〔印刷〕NISSHA株式会社 〒604-8551 京都市中京区壬生花井町3

ISSN 2186-7259

新たな連携とそれぞれの update

佐藤友哉 (さとうともよし・札幌芸術の森美術館)



美術館にとって事業の新たな見直しということは、常々必要に迫られていることだろう。その大小は問わないにしても、コレクションをいかに新鮮な切り口で見せていくか、また新たな調査や研究の成果をいかに紹介していくかなどはたえず課題となるところだ。また固定化した美術館のイメージを払拭し、いかに事業を再編していくかといった問題もあるだろう。事業の構造的な見直しがなされないとしても、予算上の問題と向き合いながら、いかにして美術館やその事業を update していくか、ということが普段から求められているということなのだ。

個人美術館の先駆けだった北海道立三岸好太郎美術館。もともとこの館は、1967年に三岸作品が遺族から寄贈されたことを契機に設立されたかつての道立美術館なのだが、設立50周年を機にリニューアルし、昨年夏から新たな試みを始めた。「#みまのめ」と題した若手作家を取り上げたシリーズ企画である。ちなみに「みま (mima)」とは同館の愛称。周知のように三岸好太郎は作風をめまぐるしく変貌させながら31歳で早逝。こうした三岸の活躍した年代に注目し、新たな企画として若手作家に焦点を当てる試みを始めたのである。もちろん作家の選定は必ずしも容易なことではない。十分な調査が必要なのは言うまでもないが、vol.4(2月13日～4月11日)まで見た限りでは力量のある作家が選定されており、見ごたえのある展示になっていた。

ともあれ三岸好太郎美術館のイメージはこうした企画によって大きく変化していくと思われるが、

とくに北海道を代表する画家である三岸好太郎とこれからの美術界を担うであろう若手作家の仕事を連携させるという試みは、個人美術館の未来への update と言ってよいだろう。

個人美術館の試みとしてももう一例あげておきたいのは、岩内町の木田金次郎美術館とニセコ町の有島記念館が連携した「有島武郎と木田金次郎展」(2018年10月13日～11月4日)である。これは有島武郎の知名度が低くなり再評価を訴えようとしていた有島記念館が、木田金次郎をモデルとした有島の小説『生れ出づる悩み』の出版100周年を機に、木田金次郎美術館とタイアップしたもの。府中市美術館や札幌で開催されたあと、「出版100年記念有島武郎『生れ出づる悩み』と画家・木田金次郎 ニセコ展」という当初のコンセプトをはっきりとタイトルに掲げた里帰り展が有島記念館(2018年11月23日～12月16日)と木田金次郎美術館(1月12日～3月31日)で開催された。この企画には有志からの助成があり、また書籍『生れ出づる悩み』を読む』も出版されるなど、館を超えた多様な連携によって支えられたことは注目される。もちろんこれによって有島や木田の update がいくらかでも実現したことだろう。

ところで美術館で一度取り上げた作家を再度取り上げるということもよくあることだ。その時には当然のことながら様々な update が図られるということになるが、その例として、北海道立近代美術館で開催された「深井克美展」(2月5日～3月21日)と、札

幌芸術の森美術館で開催された「札幌美術展 砂澤ビッキー風一」展(4月27日～6月30日)をあげておきたい。

深井克美は怪奇と抒情をあわせもった特異な画風を確立したが、30歳で自死。1983年に北海道立近代美術館で個展を開催したが、今回は没後40年、生誕70周年を機に再度開催された。しかしその内容はかつてのものを大きく凌駕したものになった。早逝によって作品数は限られているのだが、徹底した調査によってほとんどを網羅したばかりでなく、数多くの資料を発掘してこの画家に再度立体的に光を当てたのである。背景には美術評論家の正木基氏の継続した調査があり、その連携によって展覧会が実現したことは特筆されることだろう。合わせて出版された『オリオン 深井克美・全画業』も自筆文献などが網羅され、精緻な論考も付されたことによって、深井克美の update が見事になされたように思う。

砂澤ビッキーについてはこれまで道内外で数多くの個展が開催されている。その中で再度札幌芸術の森美術館で開催されることになったのは、没後30年という節目もあるが、それに増して札幌芸術の森

野外美術館に設置されている砂澤の木彫の大作『四つの風』(1986年)が倒壊するという事実はどう対応するか、という契機があった。つまり野外美術館に置かれたことでこの木の作品は倒壊を免れないが、作者は「風雪という鑿」がこの作品を完成させると述べており、倒壊し消滅することを想定していた。現在4本ある柱は1本のみになっているが、記録写真、定点カメラやドローンによる映像などを参考資料として、その行く末について考察する展覧会としたのである。

風をテーマとした木彫の大作をはじめ、新たに発見された未公開作品や資料類も数多く出品されるほか、本郷新記念札幌彫刻美術館でも砂澤のユニークな工芸やオブジェを網羅した展覧会を同時開催。また札幌の中心部に誕生した市民交流プラザでは「砂澤ビッキー・ウィーク」と題して様々な関連事業も開催されたが、広範囲にわたるこうした連携によって、砂澤ビッキーの全貌が新たに浮き彫りにされるとともに、倒壊をも作品に内在させた特異な造形思考が update されたことは、この作家に深い奥行きをもたらしたと思う。



北海道立三岸好太郎美術館 「みまのめ vol.1」展 会場風景



砂澤ビッキー『四つの風』1986年 札幌芸術の森野外美術館 撮影：前澤良彰(2018年)

地域に根差した地方美術館の活動

平澤 広（ひらさわ ひろし・萬鉄五郎記念美術館）

昨年12月22日、「大正・昭和期における東北の写真文化」と銘打ったシンポジウムが山形大学で開催された。これは写真表現の地方的な広がり、いわゆる記録として撮影されていた写真が芸術写真や報道写真、リアリズム写真など中央の写真界の動きに呼応して東北各県の写真家や写真団体が如何に反応し、どのように消化し展開していったのか。さらにその活動が東北という広域的見地から、地方色と呼べる独自性を育てていったのか検証しようとするもので、山形大学映像文化研究所が主催し、一昨年度から始まった研究会である。今回は、東北6県のこれまでの研究状況や各県の写真文化のありようを検証すべく開催されたシンポジウムであった。この研究会の狙いは、東北における芸術写真の地域的な相互関係にメスを入れようというもので、このような東北という括りで写真史をテーマにした研究会がもたれたのは初の試みである。写真に限らず、絵画や彫刻など近代の表現媒体の研究においても、同様の試みが東北という括りで開かれたことがあっただろうか。これまで特定の作家や美術団体に関わる相関を、県や地域を跨いで全国的に研究することはあったが、美術表現や美術団体の地域的活動を、東北という見地から大局的にその相関を検証しようとする動きは希薄であったように思える。全国の地方美術館が活発な研究活動を展開している今日、近代美術史を彩った表現者個人の研究は一とおり緒についた感があるが、今後の課題として、都会と地方といった点と点を結ぶ

一元的な視点から、東北や北日本、西日本といった面としての広域的な相互作用のありようについて取り組む時期にさしかかっていることを気づかせてくれた。

さて、東北の美術館の下半期の企画としては、地元ゆかりの美術家や作品をピックアップした展覧会が目をついた。それらは地域に根差した作家の個展や地域ゆかりのコレクションに切り込んだ企画で、まずは、秋田県立近代美術館の「鴻池朋子ハンターギャザラー」展（2018年9月15日～11月25日）は、同県出身の現代作家・鴻池朋子の「狩猟採集」をテーマにした大規模な個展であった。奥羽山脈のすそ野に位置し、マタギの故郷でもある秋田の県立近代美術館ならではの企画で、土地と野生動物との繋がりという地域性からも射たコンセプトであり、何よりも作品の存在感が際立つ展示構成であったことを記しておきたい。

郡山市立美術館「〈眼の人〉今泉亀撤のコレクション」展（2018年9月22日～12月24日）は、郡山の名誉市民であり、日本角膜移植制度の確立とアイバンク創設に功績のあった医学博士の今泉亀撤のコレクションを集大成した展覧会であった。氏は岩手医科大学の教授時代に様々な作家たちと交流をもち、近現代美術の一大コレクションを形成した。それらの作品一点一点、緻密な調査を行い体系的にまとめあげたもので、地域に根差した美術館ならではの企画であった。

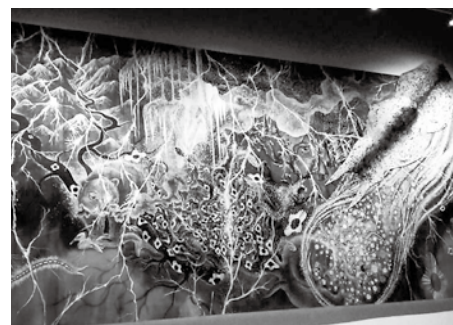
福島県立美術館の「生誕130年 佐藤玄々（朝山）

展」（2018年10月27日～12月16日）は、日本橋三越本店の正面玄関にある巨大な天女像で有名な同県出身の近代木彫刻家の大規模な回顧展で、全国巡回された本展は話題を呼んだ。同美術館はこれまでも福島ゆかりの作家の綿密な調査研究を基に、大規模な全国巡回展に仕上げるといった活動を継続的に行っており評価を得ている。このスタンスは注目すべきもので、地方美術館の大いなる指針である。

宮城県美術館の「アートみやぎ2019」展（2月23日～4月7日）は、宮城県ゆかりの現代作家の仕事を紹介する展覧会。地域に根差した美術館活動の一つとして開催してきた展覧会で、東日本大震災で中断してから8年ぶりの開催で、5回目を迎えた。県内に在住または出身のアーティストを対象とし、近年、個展やグループ展等めざましい活動で独自表現を提示しているアーティスト5人（狩野哲郎、木村剛士、鈴木ヒラク、田中望、留守玲）の創作活動を紹介し、宮城をめぐる今日の美術の

状況を提示した。

最後に、山形美術館で開催された「寄贈50周年 長谷川コレクション展」（2018年12月6日～2019年1月27日）は、そのサブタイトルに「受け継がれる美の心 日本美術の名品—江戸から明治まで」とあるとおり、重要文化財の与謝蕪村《奥の細道図屏風》を含む211点を核とした江戸から明治にかけての狩野派、文人画、円山四条派を系統的にたどることのできる充実したコレクションを紹介する展覧会である。これら収蔵品を基に企画展として打ち出したもので、展示の丁寧な設えと懇切な作品解説に加え、オリジナルの音声ガイドの制作やコレクションにかかわるテレビ番組の放映といった自館コレクションを生かす細やかな工夫が施されていた。展覧会にかける意気込みが展示に直結し、どう見せようか、いかに価値づけようかという学芸員の熱量が感じられる企画であった。この企画の設えが、今後、常設展示にどのように生かされるのか期待されるところである。



秋田県立近代美術館 「鴻池朋子 ハンターギャザラー」展 会場風景



山形美術館 「寄贈50周年 長谷川コレクション展」 会場風景

繋がる、継承、美術への旅

末崎真澄 (すぎき ますみ・馬の博物館)



神奈川県ではイサム・ノグチと日本人画家との関わりをテーマとする展示が2ヵ所で行われた。横浜美術館の「イサム・ノグチと長谷川三郎一変わるものと変わらざるもの」展(1月12日～3月24日)は、日米の血を受け継ぎ世界的視野を持ち、芸術を再び生活の中に根付かせようとした彫刻家イサム・ノグチと戦前の日本美術をリードし、理論家として西洋近代美術と古い日本の芸術文化に通じていた長谷川三郎の2人に焦点を当てる。長谷川は、ノグチにとって建築、絵画、茶道、禅など有形無形の日本文化遺産への無二の案内役であり、ノグチが日本の美術を理解する上で重要な役割を果たした。またノグチとの対話は、長谷川にも、墨や拓本、木版を用いてそれまでにない創作のきっかけを与えた。展示は、2人の芸術家の交友に焦点を当て、彼らが、何を見、何を考え、何を目指したのかを、2人がともに歩んだ1950年代を中心に、サブタイトルが示すように、変わるものと変わらざるものを明らかにしている。

川崎市岡本太郎美術館「イサム・ノグチと岡本太郎 一越境者たちの日本」展(2018年10月6日～2019年1月14日)は、岡本太郎が1950年日本アヴァンギャルド美術家クラブの主催で行われたイサム・ノグチの歓迎会でのノグチとの出会いから、以降、それぞれ欧米で芸術家として活躍した2人の芸術家に焦点を当て、個性の異なる2人の芸術家が「日本」「日本美」とは何かについて再確認する機会の展示となった。

横浜の馬の博物館「猪熊弦一郎展 馬と女性たち」(2018年10月6日～12月2日)は、丸亀市猪熊弦一郎現代美術館で収蔵されている猪熊作品のうち馬と女性をテーマにしたものを展示した。猪熊弦一郎の作品は、人物、動物、都市、宇宙に至るまで様々なモチーフに溢れている。猪熊は馬については、「神様の作られた作品の中でも傑作中の傑作」と述べ、また女性についても「あんなに完全にバランスを持った美しい立体はない」と語っており、多くの作品から、馬と女性が、画家にとって魅力に満ちたモチーフだったことがわかる。初期の写真絵画から晩年の自由なスタイルまで、ダイナミックに変貌する作品を紹介した。

埼玉県立近代美術館では、建築史に目を向けたユニークな展覧会「インボッシブル・アーキテクチャー もう一つの建築史」(2月2日～3月24日)が行われた。この展覧会では、約40人の建築家、美術家の図面、模型、関連資料などを読み解きながら、20世紀以降の国内外の完成にいたらなかった素晴らしい構想や、あえて提案に留めた刺激的なアイデアを紹介し、未だ見ぬ新たな建築の姿を展望した。未来に向けて夢想した建築、技術的には可能であったにもかかわらず社会的な条件や制度によって実施できなかった未完の建築は、作者の夢や思考がより直接的に表現されている。私達の特別展・企画展では、まずドリームプランを描くが、調査・研究の結果、展示の実現には、様々な制約があり、そのプランは大なり小なり変更を

余儀なくされる。これは作品の保全、予算などやむを得ないことが多い。このインボッシブル・アーキテクチャーは、その不可能をテーマにした新たな視点の企画展であった。

山梨県立美術館の特別展「山梨県立美術館開館40周年記念 銅版画の詩人 追悼 深沢幸雄展」(2018年9月1日～10月8日)は、1923年に山梨県に生まれ、長く日本を代表する画家として活躍した深沢幸雄の1,000点を超える銅版画のほか、油彩、陶芸、ガラス絵などを紹介している。展示では、代表作を中心にノートやスケッチブックから人となりを探り、「人生そのものが詩文集」であったことを紹介している。

水彩画は日本の学校教育の実技で学び親しみやすい芸術として、明治時代から広く愛されてきたが、栃木県立美術館における「水彩画の魅力 ターナーから清水登之まで」(1月12日～3月24日)展では、所蔵作品のターナー、清水登之、草間彌生などの

多様な水彩画を中心に150点で構成された。

最後に筆者の所属する馬の博物館について述べることをお許し願いたい。当館では、1977年の開館以来、馬をテーマにした考古、歴史、美術・工芸、動物学の分野から学際的な展示を行い、大英博物館や東京国立博物館と共催展を開き、奈良と九州の国立博物館とも特別協力する展示を行ってきた。生き物の展示では、サラブレッドなどの洋種に加えて、日本文化を支えてきた日本在来馬を継続して飼養し、それぞれの魅力を展示してきた。2013年に全国美術館会議に加盟し、現代美術をテーマにした展示、「山口晃 馬鑑」展(2016年)、「天野喜孝 天馬」展(2018年)なども行った。ところで平成末期に増えてきた美術館のリニューアルの波は、40年を過ぎた当館にも及んでいる。これから令和の時代を迎えてどのような施設で在り続けるのか、洋種や日本在来馬の遺伝子を繋ぎ、美術の本質を継承する施設としてあり続けたい。



横浜美術館「イサム・ノグチと長谷川三郎一変わるものと変わらざるもの」展
会場風景
©The Isamu Noguchi Foundation and Garden Museum, New York /
ARS - JASPAR Photo: Naoaki Nakamura



馬の博物館 展示風景

浮世絵に関する展覧会の 動向について

日野原健司（ひのはら けんじ・太田記念美術館）



筆者が勤務する太田記念美術館は、浮世絵を専門に扱っている美術館である。これまで毎月様々なテーマで浮世絵を展示し、2020年1月には開館40周年を迎えることになるが、実は、東京都において、弊館のように浮世絵をまとまった数、常時展示している美術館というのはごくわずかな数にしか過ぎない。東京国立博物館の日本ギャラリーとすみだ北斎美術館が挙げられる程度であろう。しかしその一方、浮世絵を題材とする期間限定の特別展であれば、東京都に限らず、日本各地の様々な美術館で開催されることが近年増えており、今後もその傾向は続くに違いない。そこで、昨年の冬から今年の春にかけて東京ブロックで開催された展覧会を通して、近年の浮世絵に関する展覧会の動向を紹介することとしたい。

まず、大勢の入場者を集めた注目の展覧会と言えば、森アーツセンターギャラリーで開催された「新・北斎展 HOKUSAI UPDATED」（1月17日～3月24日）が挙げられる。葛飾北斎はパスポートや新紙幣になるなど話題にのぼることも多く、2017年にはイギリスの大英博物館と大阪のあべのハルカス美術館で大規模な展覧会が開かれたばかりだが、この展覧会は2018年2月に亡くなった北斎研究の第一人者である永田生慈氏の監修によるものである。永田氏が生前に島根県立美術館に寄贈した膨大なコレクションを中心に、氏がこれまでの研究の中で新発見、再発見した作品も合わせ、北斎の全貌についての最新の成果を伝えるという

内容であった。

同じく巷間で話題となった展覧会が、東京都美術館で開催された「奇想の系譜展 江戸絵画ミラクルワールド」（2月9日～4月7日）である。豊かな想像力にあふれる江戸時代の絵師たちを紹介する内容だが、この展覧会の元となったのが、美術史家の辻惟雄氏が1970年に発表した『奇想の系譜』という学術書であった。すなわち、辻氏のかつての研究成果が展覧会という形となって結実したのである。奇想の画家として選ばれた8人の中に、浮世絵師として歌川国芳がただ一人含まれていた。近年、歌川国芳には注目が集まっており、単独の展示も各所で行なわれてはいるが、改めて近世絵画史の一員に位置づけられたことは、浮世絵研究の側からも大いに意義のあることであった。

このように、実績ある研究者たちの集大成と言えるべき展覧会が、期せずして同時期に開催されたが、北斎や国芳といったネームバリューのある絵師たちに頼るだけでなく、これまであまり注目されることのなかったジャンルの浮世絵をしっかりと掘り下げた展覧会がいくつも開催されていたことも見逃さないでおきたい。

すみだ北斎美術館で開催された「北斎の橋 すみだの橋」展（2018年9月11日～11月4日）は、北斎とその門人たちが描いた橋の浮世絵を集めるとともに、墨田区に架かる橋がどのように浮世絵で描かれ、現在まで続いているかを紹介するという、公立館らしい地域に根差した展覧会であった。ま

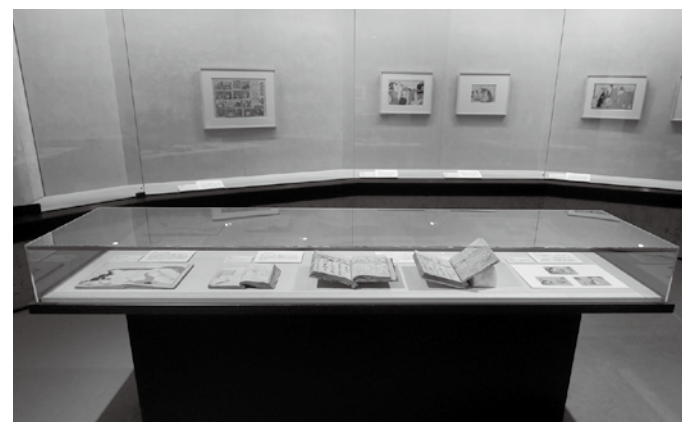
た、たばこと塩の博物館で開催された「江戸の園芸 熱—浮世絵に見る庶民の草花愛—」展（1月31日～3月10日）は、植物の栽培や花の名所への訪問、さらには、歌舞伎役者と園芸の関わりなど、庶民たちが熱中した園芸文化について、浮世絵を通して様々な角度から探るという、美術史の枠を越えた意欲的な内容であった。

渋谷区立松涛美術館で開催された「女・おんな・オンナ～浮世絵にみる女のくらし」展（4月6日～5月26日）は、江戸時代の女性たちの暮らしにスポットを当てた展覧会である。その企画もさることながら、さらなる挑戦的な試みとして、公立の美術館でありながら、春画の作品の展示も行なっていたことに注目したい。2015年に永青文庫で開催されて話題となった「春画展」以降、浮世絵の春画の認知度は高まっているが、公の場でどのように展示できるのかを今後検討する上で、大いに参考になることであろう。

最後に、筆者の勤務する館で恐縮だが、太田記

念美術館で開催した「小原古邨」展（2月1日～3月24日）も触れておきたい。小原古邨は国内ではまったくの無名の絵師であったが、その直前、茅ヶ崎市美術館で「原安三郎コレクション 小原古邨展—花と鳥のエデン—」展（2018年9月9日～11月4日、太田記念美術館とは全くの別企画）が開催されたことも重なり、その愛らしい花鳥版画が突如注目を集めることとなった。知られざる絵師の魅力を多くの人に知らしめることができたことは学芸員冥利に尽きることであり、今後の浮世絵研究においてもさらなる題材を提示できたかと思われる。

このように、浮世絵の展覧会は、大小様々な美術館・博物館で学術的に意義のある展覧会がしっかりと開催されている。浮世絵は海外へも発信しやすいジャンルであり、2020年の東京オリンピックに向けてこれからも扱われる機会は増えるだろうが、学芸員の研究成果に基づく展覧会がこれからも企画されていくことを期待したい。



渋谷区立松涛美術館
「女・おんな・オンナ～浮世絵にみる女のくらし」展 会場風景

芸術祭以降 ―美術館の空間を読み解く

荒井直美 (あらい なおみ・新潟市美術館)



アーティストによる美術館の空間の再解釈ともいべき展覧会が相次いでいる。

富山県では入善町下山芸術の森発電所美術館が、その特徴的な空間を舞台に、1995年の開館当初から作家の滞在制作を前提とした展覧会を開催してきた。「木藤純子『Winter Bloom—ふゆにさくはな』展」(2018年11月23日～2019年3月24日)は、同館のこれまでの展示の中でも、この場を生かしていたようで印象的であった。

あの大きな空間に、一見何も無い。目を凝らすと桜のような白い紙の花びらが一面に散り敷かれている。冬の冷たい空気の中、すりガラスを通して入る外光のみの照明が外の季節と時間の移ろいをじかに伝える。やがてはるか高みからははらと、そこここと定めなく、不規則な間を置いて花びらが舞い落ちる。気づかずに出ていく人もいるほどひそやかに、しかし確実にときを視覚化して見せた。

長野の二つの展覧会も見逃せない。小海町高原美術館では、これまでも現代美術のグループ展のシリーズ「現代アートシーン」を開催してきたが、今年から個展形式で行うという。その第一弾が「しーん。|山極満博」展(4月6日～6月2日)である。安藤忠雄の設計による同館の個性を逆手に取り、展示室も死角となるような隅々から、階段、スロープ、中庭に至るまで、自由な遊び心に満ちた仕掛けともいえる作品を配置。冬季休館中に時間をかけてインスタレーションを行ったという。建築に介入するばかりではなく、通常はその“外側”に展示するべき、自

立式展示壁の“内側”にも作品を置くなど、美術館の制度に対するウィットに富んだ批評をこめる。タイトルどおり、沈黙にかたちを与えるべく、小野田賢三による音のコラボレーションも冴えている。

「千田泰広展」(安曇野市豊科近代美術館、4月27日～6月2日)も一月半を費やしほぼ全館を用いたインスタレーションを展開。階段室や通路も作品空間とし、ガラスケースのある大展示室に大胆に配された《Myrkviðr》へと導く。代表作《Brocken 1》には回廊全体を充て、中庭の吹き抜け開口部をアルミホイルで覆い、充滿するミストを太陽光が差し貫くサイトスペシフィックな空間とした。

オムニバスによって試みたのは「わたしはどこにいる?道標(サイン)をめぐるアートとデザイン」展(富山県美術館、3月9日～5月19日)だ。美術家、デザイナーから警備員(!)までという7名それぞれの表現もさりながら、同館のサイン計画を担当した色部義昭を核に、「さあ、外へ」とした最終章では館内の至るところにサインという名の作品が散りばめられる。鑑賞者はこれまで足を踏み入れたことのないスペースへ誘われ、動線を意識し、建築を捉え直す。

いずれの参加作家も国内外の芸術祭に関わった経験があるが、ニュートラルな展示室以外の場を含めて積極的に読み解いていくこと、また、展示にあたって滞在制作を行う(富山県美術館でも秋山さやかが約2か月の滞在制作を行った)ことが要となっている。それは芸術祭でしばしば用いられるリサーチの応用とも言えるのではないだろうか。各地域ゆかり

の作家をとりあげていることにも好感を持った。

最後に筆者の勤務館である新潟市美術館にも触れさせていただきたい。昨年、4回目となる「水と土の芸術祭」(2018年7月14日～10月8日)が行われた。10年前の第1回目の芸術祭では、当館で展示された作品からカビが発生し、芸術祭の終了後も、芸術祭に参加した作家に関する展示からクモが発見されたということで不名誉にも耳目を集めることになった。結果的に以降2回の芸術祭では、当館は関わる事がなかった。それが昨年の第4回においては、中庭という限定的なかたちながら、公式作品を展示することができた。上述の他館の例のような作家による踏み込んだ場の選択・解釈に美術館学芸員が伴走することはかなわなかったとはいえ、当館にとっては大きな前進である。

特筆しておきたいのは芸術祭に合わせて館内常設展示室で行った「コレクション展Ⅱ LANDSCAPE 水土の作家×NCAM コレクショ

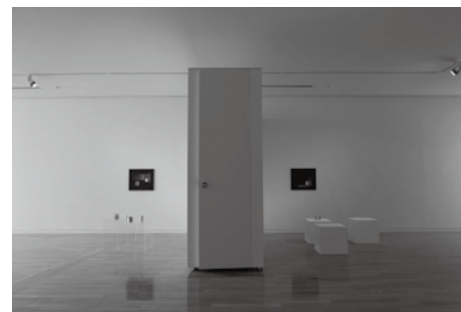
ン」(2018年8月7日～12月2日)である。過去3回分の芸術祭参加作家より、「風景」を切り口に、実際の出品作や当館所蔵の旧作によって構成、さらに所蔵品から時代を遡る作品を対比させ、この風土を浮かび上がらせた。

2016年に始まったばかりの「茨城県北芸術祭」が「効果的であったか曖昧」として中止を発表したのは記憶に新しいところだが、「水と土の芸術祭」も現段階では少なくとも同じような形式では継続しないとされている。

芸術祭鑑賞者がどこまで LANDSCAPE 展を見てくれたかはわからないが、芸術祭というもう一つの美術史を紡ぎ、個々の作品の情報を残し、語ることも必要だと感じている。反面、今回言及した作品のようなインスタレーションは収蔵が困難でもある。美術館として、我々が来館者に届けるもの、未来に手渡すものはなにか、そんなことに思いを馳せるのはなにも改元だからというだけではないはずだ。



撮影：毛利 聰



いずれも小海町高原美術館「しーん。|山極満博展」会場風景

閉館、休館はあるけれど

速水 豊 (はやみ ゆたか・三重県立美術館)



前号のこの欄でも報告されているが、名古屋ボストン美術館が昨年10月、20年にわたる活動を終えて閉館、愛知県美術館はこの4月にリニューアル・オープンするまで休館していたのに加え、昨年の夏と秋には豊田市美術館と岐阜県美術館も改修のため休館に入った。このため昨年度後半は名古屋を中心とする地域での美術館活動が表面的には不活発に見えそうな状況があり、実際、市内では駅などに掲示される美術展ポスターが一時的に少なくなったという声も聞かれた。

確かに名古屋ボストン美術館が折々の特別展によって多くの来館者を迎える都市圏の美術館であったため、その欠落は大きく感じられる。だが、この地域の美術展状況が全体に寂しかったというほどではない。名古屋市内だけを見ても、例えば徳川美術館では多種の関連作品、資料とともに《源氏物語絵巻》を公開する「源氏物語の世界—王朝の恋物語」展(2018年11月3日～12月16日)が来館者を集めていたし、名古屋市博物館の「画僧 月僊」展(2018年12月15日～2019年1月27日)は、この画家を初めて大規模かつ丁寧に紹介した意義ある企画であるとともに、インパクトのある広報イメージでも美術ファンを引きつけていたように思う。

なかでも名古屋美術館は、開館30周年を迎え、昨年春からフランス印象派に関連する記念展を2本開催したが、その後に開催された「ザ・ベスト・セレクション」展(2018年10月6日～11

月25日)は、単に作品を並べるだけでなく、様々なトピックについての解説を多用してこの館の30年間の収集活動や研究調査活動の蓄積、成果を示した節目の年の記念展にふさわしい内容であった。

閉館や休館がある一方で、この名古屋市の美のように昨年度、周年の節目を迎えた館がいくつかあり、いずれも記念展を開催している。愛知県陶磁美術館が開館40周年、稲沢市荻須記念美術館が35周年、一宮市三岸節子記念美術館が20周年、碧南市藤井達吉現代美術館が10周年など。このうち碧南市藤井達吉現代美術館は東海ブロックの美術館のなかでも新しい館の一つだが、個性的な企画展をはじめ収集や調査など10年間の活動で地元のみならず美術館界においてもその存在感を確立したように思う。

先述の改修中であった美術館は、いずれも今春から秋に再オープンし、その後が期待されるどころだが、この地域では特に今年第4回目となる「あいちトリエンナーレ2019」(8月1日～10月14日)への期待が大きいだろう。愛知県美術館や豊田市美術館の改修も、東海地域でおそらく今年最大の芸術イベントとなるこのトリエンナーレを見越して時期を調整したようでもある。今回は美術館としては、愛知県美術館、名古屋市美術館とともに豊田市美術館が会場となるからだ。

一昨年に芸術監督や開催テーマが発表され、昨年度後半からも参加アーティストの発表や、

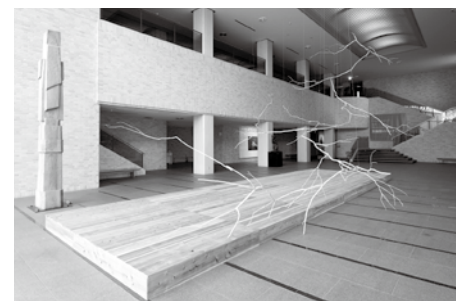
様々なプレイベント、チケットの発売開始と、この間、愛知県内を中心にトリエンナーレの開催機運を盛り上げるニュースや話題には事欠かない様子である。美術館が休館中の豊田市では、あいちトリエンナーレ地域展開事業の一環として天野一夫氏が企画した「Windshield Time—わたしのフロントガラスから 現代美術 in 豊田」(1月19日～2月11日)が市内7か所の庁舎や店舗、古い建物などを利用して開催された。開催報告書によると作品展示に加えてトークやワークショップ、学校に出向いてのイベントなど多数の関連催しも行われたようで、プレイベントとは言えないような規模の事業であった。

名古屋方面で閉館や休館があった一方、この時期注目すべき展覧会がいくつも行われていたのは静岡である。静岡県立美術館では「めがねと旅する美術展—視覚文化の探求—」(2018年11月23日～2019年1月27日)と「1968年 激動の時代の芸術」展(2月10日～3月24日)があった。いずれも巡回展なので他でも紹介されているだろうが、前者は好奇心をそそるテーマの打ち出し方

で、多様な作品と工夫が盛り込まれた心躍る展示であり、後者は対象年代を絞って多領域に分け入る内容で、文化や政治を含む時代の状況、雰囲気を実感させるような展覧会であった。

同時期に静岡市美術館では、これも他所でも開催された話題の展覧会「起点としての80年代」(1月25日～3月24日)があった。80年代をどう捉えるかというテーマはともかく、私の世代にはある程度なじみある内容のせいもあるのか、個々の作家の当時の真価がよくわかる良質な展示と感じられた。MOA美術館で開催されていたリニューアル記念特別展「信長とクアトロ・ラガッツィ 桃山の夢と幻+杉本博司と天正少年使節が見たヨーロッパ」(2018年10月5日～11月4日)もあり、この時期、特に現代美術に興味を持つ愛好者は県外からも静岡に足を運んだのではないだろうか。

三重県立美術館の現代美術展「パラランドスケープ “風景” をめぐる想像力の現在」(1月4日～3月24日)も紹介したいが、紙面が尽きたので挿図はこれでいこう。



三重県立美術館「パラランドスケープ」展 会場風景(伊藤千帆作品)



三重県立美術館「パラランドスケープ」展 会場風景(藤原康博作品)

二つのニュー・ウェイブ

中谷至宏（なかたに よしひろ・京都市美術館）



本誌前号で紹介されているが、国立国際美術館で開催された「ニュー・ウェイブ 現代美術の80年代」展（2018年11月3日～2019年1月20日）にまず触れたい。殊に関西を拠点とする学芸員にとって、80年代を総括する展覧会の企画は、誰もが一度は取り組んでみたい、取り組まねばならない課題であったに違いない。だがいつ如何なる文脈で、如何なる覚悟を以て提示すべきかの躊躇いが、その着手を遅延させていたとも解せる。ニュー・ウェイブと評された動きは、概念性の希薄さ、表層性、スケールの肥大等の特徴だと捉えられ、現在、美術に求められるべき政治性、主題性を欠くとみなされがちであったことも一因かもしれない。続いて兵庫県立美術館で開催された、「Oh！マツリ☆ゴト 昭和・平成のヒーロー&ピーポー」展（1月12日～3月17日）が示した鮮やかな批評性が持つリアリティーの構成子には、すっぽりと80年代美術が欠落していたこともそのことを示しているだろう。だからといって、あるいはそれ故に80年代の波を揺動し続けた文脈と、政治的には見えない政治性を探り出す作業が不可欠であることは言うまでもない。

「現代美術の80年代」展で採用された年代記的展示は、この重い課題の回避として、また最初の着手としては適切な手法であったと言える。ただ展覧会自体には組み入れられなかったが、重要な問題圏はカタログのコラムとして提示されていた。「時代様式としてのインスタレーション」「関西ニュー・

ウェイブ」「現代陶芸からクレイワークへ」「版画にまつわる時代の様相」。これらは80年代美術を考える上でとりわけ重要なトピックスであり、今回の展覧会を序章として、次なる試みへの提起と捉えた。ただ序章であったとしても残念に思わざるを得なかったのは、タイトルに「ニュー・ウェイブ」を添えながら、関西を冠した語はコラムに限定されたことである。もちろん「ニュー・ウェイブ」の語は、地域を限定しない呼称として流通していたこともあり、また国立館としての責務が関与していたのかもしれないものの、80年代にこの語を被せるなら関西に限定した提示がよりふさわしかったに違いないと感じる。

それ以前にはなかった新しい動きとして「ニュー・ウェイブ」という語を捉え得るとすれば、美術館運営に関するこれまでにない取り組みをもう一つの「ニュー・ウェイブ」として紹介・報告することも許されるだろう。それは京都市美術館のネーミング・ライツと美術館事業の民間委託である。筆者自身は館の意思決定に関与する立場にないため、京都市として公表している内容に沿って状況を報告したい。

ネーミング・ライツに関しては、去る2017年2月1日に京都市と京セラ株式会社との間で契約が締結され、再開館後50年間、通称として「京都市京セラ美術館」という名称を用いることが決定された。この通称は、改修される本館、新築される新館等という施設と敷地に対して再開館後に適用

されるもので、美術館の正式名称は「京都市美術館」として維持され、2000年に開館した別館は、「京都市美術館別館」のままである。ただ4月9日の東京における記者発表で、再開館日が2020年3月21日と公表され、この発表の前後から、交通標識やバスの案内音声等で「京都市京セラ美術館」とこの通称が流布し始めた。正式な使用開始は再開館後ではあるが、契約上使用期間は、「リニューアルオープン日から円滑に使用するために必要な範囲で、契約の締結以降、使用することができる」とされており、美術館のウェブサイトも通称で表記されることとなった。ただ所蔵作品の所有者は京都市であり、所管が京都市美術館であるため、今後も所蔵先は「京都市美術館」となる。そもそも命名権は敷地を含めた器に対して与えられるため、円滑に使用されるべき通称と、作品の所蔵先としての正式名称、また別館での通称不使用と、名称の複雑な二重性は避けられないのである。

もう一つの新事象は、(1) オープニング事業計画の立案、(2) 展覧会の誘致、(3) 賑わいの創出などを業務内容とする「京都市美術館リニューアル準備業務委託」について委託業者が選定され、「リニューアル準備室」が稼働していることである。事業実施の主体は直接自治体が担いつつ、企画業務を委託された「準備室」では、従前の事務職員、学芸職員とは別に、ゼネラル・マネージャーを筆頭に、企画推進、学芸、広報、営業等の担当者が配置されて業務が行われている。学芸業務は、作品収集・管理や常設展と改修される本館での企画展、「準備室」は新館での企画展と概ねの棲み分けがされているが、命名権とは本質を異にするものの、こちらも外部からは見えにくい二頭立て構造となっている。

いずれもおそらく前例のない事象だと思えるが、3、40年後に如何なる形で「ニュー・ウェイブ」として回顧され検証されるであろうか。



再整備中の京都市美術館（京都市京セラ美術館）
改築中の本館

ミュージアムを振り返りつつ 考えること

赤井あずみ（あかい あずみ・鳥取県立博物館）

全国的美術館の改修にともなう休館とリニューアルオープンラッシュ、とも言うべき状況は、ここ中国ブロックでも始まっている。前号の報告に各地の動きがレポートされているため詳述は避けるが、いずれの館も開館から30～40年目を迎えているということは、40歳半ばとなる筆者の世代が地方美術館で育った第一世代ということもできるだろう。実際美術館に纏わる幼い記憶は、連れ立って行った家族の高揚感と、会場のただならぬ緊張感とともに身体に深く刻まれている。自らの意思で美術館に出かけるようになり、図らずも新県立美術館の立ち上げに携わるようになった筆者にとって、リニューアル直前／記念展は思わぬ過去の記憶を引き出してしまふトリガー的な存在—そういえばヘンリー・ムーアの《アーチ》の前で撮った記念写真はどこへ行ったのだろうか—であると同時に、先人たちの労苦と熱情を想い、感服する機会でもあった。

「マイ・ベスト・記憶に残る美術館」のひとつ、広島市現代美術館の開館30周年記念特別展「美術館の七燈」（3月9日～5月26日）は、数あるリニューアル記念／直前展のなかでも突出して興味深かった。「観客」「建築」「場所」「保存」「歴史」「逸脱」「あいだ」という7つの章立ては、ジョン・ラスキンが著書『The Seven Lamps of Architecture（建築の七燈）』で7つの建築の条件を示したことに由来している。とりわけ2章の「建築」の展示は小企画展並みの充実ぶりであった。ヘンリー・ムーアと黒川紀章という、館の屋台骨とも言うべき2人

に加え、コミッションワークとして階段と一体化したモニュメントを手がけた井上武吉の仕事が、ドローイングや図面、写真によって自館との関わりに沿いながら紹介され、制作の基盤となった彼らの思想的背景に触れつつ、その成果としての美術館を巡りながら作家と対話するかのような体験ができた。順路が不明瞭で何度も階段を登ったり降りたりする複雑な空間（必ず一度は迷子になる）はこれまでは苦勞としか思わなかったが、うろろと歩き回るうちに場面に出会うことこそこの建築家の意図だったのかもしれない、と思うに至った。建物だけではなく、日本初の公立現代美術館として、また「広島／ヒロシマ」という二つの名前を持つ特殊な場所にある美術館として個性的な活動を続けてきた軌跡が見事に描かれた展示であった。

一方、筆者が所属する鳥取県立博物館では、2024年の新県立美術館の開館を見据えた二つの企画展を開催した。一つは「Our Collections！鳥取県のアート・コレクションの、これまでとこれから」（2月16日～3月10日）。前年度に開催された常設展の拡大版とも言えるコレクションのジャンル別総覧展「鳥取美術散歩」に引き続いた企画ではあるが、今回は「コレクションの形成」にフォーカスし、鳥取県立博物館の開館前後に寄贈された作品群に始まり、個人コレクションの収集による充実、堅実な調査による郷土作家の掘り起こし、前美術館準備室時代に購入した作品、そして昨年度1年間かけて実施したアンケート投票によって選ばれた作

品、とクロノロジカルな構成でコレクションを紹介。さらに未来の美術館への布石として、いくつかの収集方針候補—それらは実際に課内会議で学芸員が提案した—から、国内各所より借用した70年代から現在に至るまでの作品を展示し、その可能性を探ることを試みた。もう一つは「ミュージアムとの創造的対話 vol.2 空間／経験」そこで何が起きているのか？」（2018年11月23日～12月24日）。展示室の内外を使って人やモノ、場との対話を重ねることに主眼を置いた本展では、今回3名の作家が展示に挑んだ。印象深かったのは、それぞれの作家が見せた当館のコレクションへのアプローチである。梅田哲也は動物の剥製資料や植物標本といった自然資料をインスタレーションに取り込み、小山田徹は石器や土器といった考古資料を実測図とともに展示した。結果、それぞれの分野の「価値」の置き方の違いが浮き彫りとなり、改めて美術（館）の特殊性を認識した。

美術館の活動というテーマとは少し逸れるが、中国地区における昨今の美術動向として、オルタナティブな拠点を紹介したい。手前味噌な話ばかりで恐縮ではあるが、筆者は鳥取市中心市街地に位置する廃病院を活用したアートプロジェクト「HOSPITALE（ホスピタイル）」に関わってから今

年で7年目を迎える。滞在制作を軸に活動する本事業は、アーティストの実験的な創作活動を支援し、それを地域に開くことで寛容性のある土壌づくりを行ってきた。2018年の招聘作家・山下残はマレーシアの国政選挙をテーマにしたダンスの新作を手がけたが、政治性をもつことやジャンルの垣根を越えた活動を紹介すること、なによりも「なにがでてくらかわからない」ものに投資すること、という美術館としてはハードルの高い（と思われている）ものを積極的にとりあげている。一方、瀬戸内海では廃校を利用し、彫刻家の柳幸典がディレクターを務める「ART BASE 百島」が2012年にオープンし、柳の巨大なインスタレーションをはじめ、原口典之のオイルプールなど美術館では展示が困難な作品が常設されている。毎年秋の企画展は柳の強いキュレーションによる大胆な展示が恒例となっており、2018年には榎忠が自動小銃をモチーフとした作品が新たに整備される拠点施設に展示され、話題を集めた。

成功を収め続けている瀬戸内国際芸術祭とも、既に所与のものとして存在する公立美術館とも異なるこれらの第3の活動は、どこに、何を蓄積することができるだろうか。それぞれに課題はありつつも、互いを相対化し合い、補完し合う存在となることに期待している。



広島市現代美術館建物入り口から市街地を臨む



広島市現代美術館
「美術館の七燈」チラシ



アート・プロジェクト「HOSPITALE」の拠点施設
旧横田医院

四国は一つ

江川佳秀（えかわ よしひで・徳島県立近代美術館）



2月21日、22日の2日間、高知県立美術館で2018年度四国美術館会議の会合があった。全国美術館会議と紛らわしいが、全く別個の組織である。加盟館は四国の公立、私立の美術館12館。

歴史は思いがけず古く、正確な時期は不明だが、1980年代半ばにはすでに前身となる組織があった。したがって30年以上の歴史を重ねてきたことになる。しかし近年は完全に形骸化していたのが実情で、関係者の間では、開催の意義すら疑問視する声が出ていた。そこで2015年に関係者が集まって、解散を含め、今後のあり方を協議する場を持った。その場の結論は、解散するのは簡単だが、それでは惜しい。立て直しに向け、今少し方策を探ってみようということだった。

活性化のためのアイデアとして、展覧会の共同企画なども話題に上がったが、とりあえずは年1回の会合を催すことにした。従来は各館の代表者が集まって、各館の事業報告を聞くだけの会だったが、見直し後は各館ごとに一つずつトピックな話題を用意し、2日間かけて報告会を開く。初日の夜には必ず懇親の場を設ける。そして、できれば館長、学芸の責任者、若手学芸員など、各館ごとに立場の違う複数名の出席を求める。

今後のあり方を協議する場で話題になったのが、他の地域に比べると、四国は学芸員の交流が希薄でないかということだった。外から見ると、四国は一つのまとまった地域に見えるかもしれない。しかし、陸地の大部分を海岸近くまで迫り出した急峻な山

地が占め、公共交通機関が未整備なこともあって、都市圏と比べると相互の人の往来はあまり活発でない。四国は一つでなく4つなんだと、四国ではまことしやかに語られることもある。

当然のことながら、学芸員たちの県域を越えた交流も容易でない。むろん皆無ではないが、専門が違ったり、年齢や役職が違ったりと極端に関係が希薄になるのだ。四国の面積は首都圏の東京、千葉、埼玉、神奈川を合わせたよりはるかに広い。一方、人口は、四国4県を合わせても横浜市をわずかに上まわる程度だ。広い場所に美術館が点在し、学芸員たちはそれぞれの場所に隔離されているかのようだ。

近年繰り返し発生している大規模災害も話題になった。全国美術館会議には災害発生時の支援活動に関する取り決めと実績があり、万一のとき頼りになるのは、全国美術館会議を通じた全国からの支援だ。しかし、タイムラグがあるはずで、初動段階では近隣の美術館に助力を求めることがあるだろう。その時、お互いが初対面では、スムーズにいかないのではないかというのだ。

年1回の会合に、各館から複数名の参加を求め、懇親の場を設けることにしたのは、専門や世代、役職を超えて、お互いに顔が見える関係を作るための工夫だった。

見直し後の最初の会合は、愛媛県美術館が幹事館になって、2015年に新居浜市美術館で開催した。その後、香川、徳島とまわり、今回の高知でちょう

ど四国を一巡したことになる。高知県立美術館では、各県からいずれの美術館にとっても日々の活動に直結する具体的で有益な報告があり、さらに「開館25周年記念 ニュー・ペインティングの時代」展（1月19日～3月24日）の会場では、展覧会の担当者から開催までの種々の事情など、現場ならではの説明があった。夜の懇親会を含めてきわめて濃密な会合だった。4年前に比べて、確実に相互の理解が深まっていると感じられた。

このような会合を2巡、3巡と続けていけば、いずれ四国にも、他の地域で見かけるような県域を越えた学芸員の親密な交流が生まれてくるのではないだろうか。そしてその中から、自ずと展覧会の共同企画や防災のための研究会なども生まれてくるのではないかと期待している。

紙数も残り少ないが、最後に簡単に展覧会にふれておく。

今さらだが、全国の美術館が開いている展覧会を見渡すと、過去も現在も、地元で縁がある作家や美術事象を取り上げた展覧会がコンスタントに続いていることに気がつく。展覧会というと、どうしても

大都市で開かれる世界的な名品展や、美術の大きなテーマを取り上げた全国巡回展に目がいきがちだが、実はこのような展覧会が、美術界の大きな潮流なのだろう。

2018年度下半期の四国でも、愛媛県美術館では企画展「石本藤雄展—マリメッコの花から陶の実へ—」（2018年10月27日～12月16日）と、コレクション特別展「生誕100年 古茂田守介—イキル、カク—」（2018年10月20日～12月24日）があり、高松市美術館では「音丸耕堂展—華麗なる彫漆世界—」（2018年9月15日～10月21日）があった。筆者が勤務する徳島県立近代美術館でも「日下八光日本画展—自然美の探求と知られざる画業—」（2018年9月15日～11月4日）があった。

こうしてみると全国的美術館は、一斉に地域的美術の掘り起こしに取り組んでいると言ってもいい。地域的美術というと、等閑視されるきらいもあるが、このような活動があって、初めて日本美術の裾野の広がりや奥行きが見えてくるはずだ。各地の美術館は、地域的美術館としての責務を誠実に果たしていると言えるだろう。



2018年度四国美術館会議 高知県立美術館
「開館25周年記念 ニュー・ペインティングの時代」会場にて



徳島県立近代美術館
「日下八光日本画展—自然美の探求と知られざる画業—」会場風景

インバウンドとコレクション

ラワンチャイコン寿子(らわんちやいこん としこ・福岡アジア美術館)

冒頭から恐縮だが、当館も開館して20年がたった。この間の大きな変化は改めて語るまでもなく、開館前後にFAXや郵便でアジア諸国とヤキモキしながら通信していたことが懐かしいほどだ。いまでは、美術館を一步出れば、瞬時に世界中にアクセスできるスマホを片手にした外国人の姿が目につき、聞こえてくる言葉も韓国語や中国語、広東語、ときにタイ語と幅広い。こうした外国人観光客、とくに個人のインバウンド客が常設展の入場者に占める割合は年々高まっているのが、各館に見られる状況である。その傾向を受けて、そして何よりも来たる五輪開催に向けて、インバウンド客へのサービス向上が現場に求められている。展示作品の多言語による解説、館内案内や利用ルール等の多言語によるアクセシビリティの向上などで、外国人にも親切で利用しやすい施設が目指されている。

展覧会については、自館のコレクションをもとにした特別企画展が目につく。それが顕著になったのは、リーマンショック後の2009年頃からである(九州藝術学会誌による)。そこには、作品を借用する展覧会よりも経費を押さえられるという事情もあるだろう。一方で、周年事業にふさわしい点や、学芸員が落ち着いて所蔵品研究を行ない、(知られざる!)コレクションの魅力を県民市民へPRできる利点がある。いわば「正当な路線」だ。そして、インバウンド客はじめ観光客と相性がいいのはコレクション展だと、福岡市の美術館博物館が経済観光文化局所管になって以来、常々思っている。とい

うのもふつう、関係者かコアなファンでもない限り、ひとはわざわざ遠くまで(しかも海外まで)特別展を見に行ったりしない。旅先で見るのはコレクションなのである。

2016年に開館した久留米市美術館の「名画が奏でる8つのフーガ 青木・セザンヌ・ルノワールブリヂストン美術館コレクション展」(2018年7月14日～9月9日)は、同館の前身である石橋美術館時代に60年以上展示された作品のいわば里帰りであった。8つの部屋それぞれに軸になる1点が置かれ、それから「連想される」作品が時代や地域を超えて緩やかに展開された。「連想」で構成する趣旨にやや違和感があったものの、かつてあった場所で「名画」に再開する喜びは大きかった。福岡県立美術館では、「鹿児島寿蔵の人形と短歌」展(2018年10月6日～11月25日)が開催された。新規寄贈と既収蔵を合わせて生誕120年目に行われた回顧展であり、同館における寿蔵研究の成果を示す企画であった。福岡出身の寿蔵は人形作家でアララギ派の歌人でもあったため、人形と短歌が会場に並び、観客は寿蔵の作家としての全容を見渡せた。福岡の近現代工芸に力を入れる同館らしい企画であり、会場後半には福岡の工芸のコレクションも展示され、その中で寿蔵の仕事を考える機会にもなっていた。福岡市美術館のリニューアルオープン記念展も、「これがわたしたちのコレクション」(3月21日～5月26日)であった。インカ・ジョニバレ CBE氏の

個展も同時開催されたが、そこを除いた全館を贅沢に使い約300点が一堂に会した展示は、1979年の開館以来最大規模であった。導線も部屋の構造も、壁や床や天井も一新された空間に並ぶ作品は新鮮に感じられたし、コレクションを前面に押し出した広報効果もあって、市民にとっては「名品」の再発見となっていた。ただ、全館を使った展示は、数多くの所蔵品を見る絶好の機会だった一方で、展示構成のストーリーを不明瞭にした嫌いはあるだろう。そして当館でも、今秋10月5日から開館20周年記念展としてコレクションによる企画を行う。冒頭に書いたようにインバウンド客を意識した広報、作品の多言語解説の充実が課題である。それらの課題に取り組むことで、新しい視野でコレクションを紹介する契機になると考えている。

最後に、学芸員の長年にわたる努力や日々の美術館活動のうえに実現した企画にも触れておきたい。つなぎ美術館の「ぼくのおくさん☆柴川敏之展」(2018年9月8日～11月25日)は、夫婦のパー

トナーシップを切り口に愉快地に地域の課題に迫り、制作プロセスも含めて社会教育や福祉など異分野の専門家を巻き込んだ挑戦的な試みだった。熊本県立美術館の「変革の煽動者 佐々木耕成アーカイブ」展(2018年10月6日～12月16日)や沖縄県立博物館・美術館の「宮城健盛展」(2018年9月12日～10月28日)は、学芸員が地元作家の奇跡を丹念に掘り起こした展覧会で、美術館の基礎調査力を伝えていた。また当館でも「闇に刻む光—アジアの木版画運動1930s-2010s」展(2018年11月23日～2019年1月20日)を行った。アジア各地の社会運動と結びつき、運動を推し進めるメディアとして機能した木版画に光を当てた初の展覧会で、民衆の声が聞こえそうな作品群は迫力があつた。これらの企画のように地道な作業を通してつくられる展覧会も美術館の真面目であり、その上で観光という視点で革新されていく美術館や展覧会があるのではないかと考えている。



改装後の福岡市美術館 東光院仏教美術室

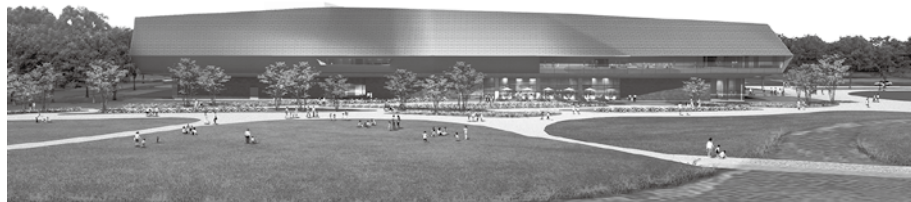


福岡アジア美術館「闇に刻む光」展での英語ギャラリートアーの様子

NO. 1

国立アイヌ民族博物館設立準備室

〒001-0021 北海道札幌市北区北21条西11丁目北海道大学北キャンパス総合研究棟3号館(2019年11月まで)



建物完成イメージ

TEL: 011-350-5100 (2019年11月まで)

FAX: 011-350-5106 (2019年11月まで)

HP: <http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/ainu/>
(開館後には館HP立ち上げ予定)

住所: 北海道白老郡白老町若草町2丁目3番1(2019年11月～)

[開館時間] 未定

[休館日] 未定

[開館時期] 2020年4月24日開館

国立アイヌ民族博物館は、2020年4月に北海道白老町に、先住民族アイヌの文化の振興、普及、再創造に寄与することに特化した日本で最初の国立博物館として開館予定である。「先住民族であるアイヌの尊厳を尊重し、国内外にアイヌの歴史・文化等に関する正しい認識と理解を促進するとともに、新たなアイヌ文化の創造及び発展に寄与する」を設立理念とし、展示・教育普及・調査と研究、博物館人材開発、資料情報の収集・保存・管理や博物館ネットワーク構築などの各種事業を展開するため、現在準備を進めている。

白老町は札幌から約1時間、新千歳空港から約40分の場所に位置し、南は太平洋に接した、東西に細長い町である。その東側にある豊かな自然に抱かれたポロト湖のほとりに、アイヌ文化の復興・発展のための拠点となるナショナルセンターとして、「ウポポイ(民族共生象徴空間)」が誕生する。主な施設に「国立アイヌ民族博物館」のほか、古式舞踊の公演や多様な体験プログラムを通じてアイヌ文化を体験することができるフィールドミュージアムの「国立民族共生公園」等がある。

博物館の建物は、周囲の自然景観との調和をコンセプトに、北側に面する湖を取り囲む周囲の丘と

緑の中に溶け込むようなデザインとなっている。基本展示室(床面積約1,300㎡)では、アイヌ民族の視点で「わたしたちのことば」「わたしたちの歴史」「わたしたちの世界」「わたしたちのしごと」「わたしたちの暮らし」「わたしたちの交流」のテーマについて紹介する。伝統的なアイヌ文化の一面的な展示にとどまらず、現代に息づく多様なアイヌ文化とそれに関わる人々についてもスポットをあてる。また、展示室中央にはこの6つのテーマの代表的な資料が一堂に会する「プラザ展示」や、体験キットを使って体感できる「探究展示ーテンパテンパ」などのコーナーがある。さらに、特別展示室(床面積約900㎡)では国内や海外の博物館などと連携し、アイヌ文化、先住民族文化をはじめ、様々なテーマの特別展やテーマ展を開催する予定である。

また、博物館では世界で最も消滅の危機に瀕する言語の一つであるアイヌ語の使用を活性化させることも期待されており、館内の第1言語はアイヌ語としている。アイヌコミュニティとの連携やアイヌ文化に関する実践的知識を持つ博物館人材の育成など、これまでにない挑戦を試みながら、「将来にわたり成長しつづける博物館」を目指していく。

(宮地鼓・みやじつづみ)

NO. 2

太田市美術館・図書館

〒373-0026 群馬県太田市東本町16-30



TEL: 0276-55-3036

FAX: 0276-22-1066

E-mail: info@artmuseumlibraryyota.jp

[開館時間]

午前10時から午後8時まで(日曜・祝日は午後6時まで)
企画展の観覧は午後6時まで入場は午後5時30分まで

[休館日]

曜日(祝日・振替休日の場合は翌日)、年末年始

[開館時期]

2017年1月14日

太田市美術館・図書館は、まちに創造性をもたらし知と感性のプラットフォームとして、「創造的太田人(そうどうてきおおたびと)」を基本理念に、太田で育まれてきたものづくりの英知を継承しながら、市民によるこれからのまちづくりの拠点となることを目指し、2017年1月のプレオープンを経て、同年4月にグランドオープンを果たした。

美術館と図書館の複合施設であることから、斬新な発想により人々の感性を刺激する多彩な美術作品と、創造的発想の源泉となる広範な知識を提供する図書資料を同時に閲覧することができる。市民が求める「美術館と図書館をもっと混じり合わせたものに」するために、美術館と図書館を一体として運営するという考え方を取り入れた。

「本とつながる」をテーマとしたイベントや多様性あふれる世界の文化、感性に出会えるワークショップの開催など、美術館と図書館の垣根を超えた事業を展開している。

美術館エリアは、スペックの異なる三つの展示室で構成され、多種多様な作品の展示やワークショップなどアーティストによる活動に対応が可能となっている。本と美術の多様なかかわりをテーマとする「本と美術の展覧会」や地元作家を発掘する展覧会などのシリーズ化を図るとともに、太田の「ものづくり」の魅力

をアートを通して発信する事業を展開するなど、文化・芸術を多方面から紹介する企画展を年間4～5本行う。

さらに、子どもたちが芸術に直接触れる機会となる場(子ども鑑賞ツアーなど)を提供することで、市民がアートを身近に体感できる環境を目指している。

図書館エリアでは、世界60ヶ国以上から集めた1万冊を超える絵本・児童書やアートブックがそろい、豊かな創造性を育む「知の拠点」となることを目指している。絵本と児童書は小さなノーベル賞と呼ばれている「国際アンデルセン賞」受賞作をはじめとした貴重な洋書を取り揃え、図書館最大の特色となっている。また3階のレファレンスルームには美術評論家の針生一郎の蔵書の一部、約1,700冊を収めた針生一郎文庫が開設され、美術関係者にとっても貴重な資料が収められている。

これからも、美術館と図書館が混じり合う施設として、知性と創造性を育む企画展事業を柱としながら、様々なかたちで市民参加という要素を取り入れたイベントを開催するなど、地域とのつながりを持ちながら文化交流の拠点として人を呼び込むための魅力ある活動を積極的に発信していきたい。

(富岡義雅・とみおかよしまさ)

川口市立アートギャラリー・アトリア

〒 332-0033 埼玉県川口市並木元町 1-76



TEL: 048-253-0222
FAX: 048-240-0525
E-mail: art-gallery@atlia.jp

[開館時間]
午前 10 時から午後 6 時まで（入館は午後 5 時 30 分まで）
※企画展開催中の土曜日は午後 8 時まで開館する場合あり

[休館日]
月曜日（月曜日が祝日の場合はその翌平日）、
年末年始、施設整備期間

[開館時期]
2006 年 4 月 22 日

川口市立アートギャラリー・アトリアは 2006 年 4 月にオープンした小さなアート施設である。当館は、地域の子供たちを中心に、市民が新しい表現に出会い多様な価値観を認め合う場を目指して活動をしている。

当館が位置する「リボンシティ」は、1925 年から約 80 年にわたり地域に親しまれてきたサッポロビール埼玉工場の跡地に公・民が相互に連携することでもち機能を拡充した魅力的なまちづくりを目指し整備された。市内の交通要所ともなっている川口駅から徒歩圏内でありながらも、大型ショッピングセンター、住宅街区、またアートパークと名づけられた都市公園を有する。この公園内にサッポロビール株式会社から建物の寄贈を受け、当館が誕生した。公園に面してひろく張り出したウッドデッキとガラス張りの廊下が特徴的な建物は、約 5.5m の天井高を持つ平屋づくりで、より開放的な印象を与えるよう設計された。ギャラリースペースの床材にはサッポロビール工場の土台を支えた松杭を再利用しており、地域の記憶の上にまた新たな文化を築いていく活動を下支えしている。

自主企画を中心に年 3 ～ 4 回行方企画展については、表現がまさに生まれる瞬間に立ち会う機会を創出することを念頭において実施している。中でも地域から生まれる新しいアートシーンを探るべく気

鋭のアーティストと市民がともに制作活動を行う〈公募 新鋭作家展〉は、特に人気を博している。

同時に、地域や学校との連携事業も特徴で、〈アーティスト・イン・スクール〉においては、小中学校の図工・美術の授業にアーティストを講師として派遣し、その指導のもと児童・生徒が制作した作品や記録を展覧会で公開しており、美術教育における先駆事例として注目されつつある。

このように、ワークショップ・講座を中心とした創作体験を数多く行い、経験を問わず参加できる内容を目指しつつも、第一線で活躍するアーティストなどを講師に起用し、技術の習得を目指すのではなく居合わせた参加者・講師のコミュニケーションを促して新しい発見や好奇心への刺激を得ることを目的としている。

さらに、ギャラリースペースそのものを市民に開放し、創作活動の発表の場として利用していただく「貸しギャラリー事業」も実施している。

収蔵品をもたないギャラリースペースとして、よりオープンな雰囲気や、アートが内包する多くの価値観を共有し発信することを基軸に展開してきた活動は、そろそろ 15 年という節目を迎える。多文化共生の現場でもある川口市の文化的活動の拠点の一つとして、より多くの出会いを創出できる場を目指していきたい。

(秋田美緒・あきた みお)

清里フォトアートミュージアム

〒 407-0301 山梨県北杜市高根町清里 3545-1222



TEL: 0551-48-5599
FAX: 0551-48-5445
E-mail: info@kmopa.com

[開館時間]
午前 10 時から午後 6 時まで（入館は午後 5 時 30 分まで）
午前 10 時から午後 5 時まで（入館は午後 4 時 30 分まで、12 月のみ）

[休館日]
火曜日、7・8 月は無休、展示替期間、
冬季休館（12 月半ば～3 月半ば）

[開館時期]
1995 年 7 月 7 日

清里フォトアートミュージアムは、1995 年 7 月、山梨県北西部、八ヶ岳の南麓に位置する清里高原に開館した。年に 2 ～ 3 回の企画展を中心に活動を続けている。2019 年 6 月現在の収蔵作品数は約 11,000 点で、展覧会企画及び作品の収集は、次の三つの基本理念に基づいて行っている。

1) 生命（いのち）あるものへの共感

表現のジャンルや技法にかかわらず、生命を慈しむすべての作品に門戸を開く。主に 1900 年以降に制作された国内外の作品を収集・展示する。

2) 永遠のプラチナ・プリント

プラチナ・プリントとは、写真の古典技法の一つで、白金を用いた画像は黒のしまりがよく、階調の幅が広く、耐久性が優れていることが特徴である。プラチナ・プリントが誕生した 19 世紀から現代までの作品を、国内外から広く収集している。比類ない表現技術を持つプラチナ・プリント作品の収集および定期的に開催するワークショップにより、継承・発展をはかりたいと考えている。

3) 若い力の写真：ヤング・ポートフォリオ

「ヤング・ポートフォリオ (YP)」とは、1995 年の開館以来 24 年間継続している国際的なプログラムで、毎年 35 歳以下の写真家に作品を公募し、当館のパーマナント・コレクションとして購入・収蔵することによって支援する。私たちは、完成への途上で闘っている青年たちの作品こそが常に写真の可能性や表現領域を拡げて来たと考え、1995 年の開館時より毎年この活動を継続している。これま

で、世界 77 ヶ国 10,356 人 133,404 点の応募作品のなかから、45 ヶ国 785 人 6,105 点（2018 年度時点）の作品を永久保存した。YP の収蔵作家のなかからは、国内外の主要な写真賞を受賞し、活躍する作家が多数生まれている。これらの収蔵作品及び作家資料は、当館ウェブサイト内のデータベース上にて閲覧することができる。また、館内でも、内外の YP 作家による写真集・著作約 200 点を常時閲覧することができる。

なお、YP コレクションから厳選した作品は、2014 年、2018 年に東京都写真美術館にて、そして 2018 年には、国立台湾美術館へ巡回した。今後も、国内外の会場への巡回の機会を求めて行く予定である。

教育普及活動としては、館内のスタジオ、暗室、会議室を利用して、カメラの内部を体験できる「ピンホールカメラの部屋」や、夏休みの親子向けピンホールカメラ・ワークショップ、県内外への出張授業、予約による収蔵作品のプリント・ビューイングなどを行っている。また、館に併設の音楽堂を利用してチャリティ・コンサートも毎年開催している。

当館の初代館長・細江英公が写真家であることから発案された YP。この国際的なプログラムが持つ役割と意義は、今後さらに重要となるだろう。今後も YP を活動の中心として、様々な企画展により写真の幅広い魅力を発信し、「写真と写真家のための美術館」を体現する運営を目指して行きたい。

(山地裕子・やまじ ゆうこ)

たましん歴史・美術館

〒186-8686 東京都国立市中 1-9-52 多摩信用金庫国立支店 6 階



TEL: 042-574-1360
FAX: 042-577-5070
E-mail: info@tamashin.or.jp

【開館時間】
午前 10 時から午後 6 時まで (入館は午後 5 時 30 分まで)

【休館日】
月曜日・祝日、年末年始、展示替期間

【開館時期】
1991 年 6 月 10 日

たましん歴史・美術館は、1987 年に開設した「たましん美術サロン」を改称して 1991 年に開館した。「たましん」は、東京都の 3 分の 2 にまたがる「多摩地域」を営業エリアとする多摩信用金庫のこと。信用金庫が設立母体の美術館は全国的にも数少ないが、信用金庫と地域美術館は、金融と美術という一見、相反するものを扱う反面、理念としては共通項が多い。「地域社会への貢献」はその最たるものである。

JR 中央線、国立駅南口前の多摩信用金庫国立支店の 6 階という好立地に美術館は所在する。ワンフロアの中央に一つの展示室とその外周を展示スペースとした小規模館だが、近年は春に多摩地域にゆかりの作家の特別展、夏に親子向けの夏休み企画、秋に東洋古陶磁の所蔵品展、冬に多摩の作家の所蔵品展、という構成で年間 4 会期の展覧会を開催。併せて教育普及活動として展示解説、ワークショップ、講演会などのイベントを企画する。展示では、作家及び作品調査、修復などの成果も公開することで、作品に対する理解をより深めてもらうことを心掛けている。また、地域の画廊や美術館と連携した展覧会の実施、周辺の小中学校での鑑賞教育に取り組むなど、小規模ながら日々、活動の拡充に努めている。

所蔵品は、近代絵画・彫刻 187 点、東洋古陶磁

171 点、ほか工芸・浮世絵等と、運営するたましんギャラリーで個展を開催した多摩地域の作家の作品等を収集し、絵画・版画・彫刻等 4,550 点、総数 5,000 点以上を数える。しかしその半数は、風景画家・美術教育者である倉田三郎 (1902-1992) の素描であり、油彩と自筆原稿等の資料とともに一括寄贈を受けたことが美術館設立の契機となった。ほか、佐藤多持、関頑亭、松村健三郎、小貫政之助等が所蔵品の中心となる。当館の独自性は、県や市の行政区分とは異なった 30 市町村にまたがる「多摩地域」という圏域が研究と収集の対象となることだろう。

毎春、駅前の大学大通りの桜の見頃には、多くの人が行き交い、美術館にふらりと立ち寄る。「ヨーロッパではどの街にも美術館があって、その街の芸術が誇りを持って展示されている。これが地域文化の姿だよ」館の運営には、そう地域文化の核心を語った倉田三郎の、地域に親しまれる「まちの美術館」への想いが受け継がれている。

本年 9 月に、運営するたましんギャラリー (立川市)、御岳美術館 (青梅市) を閉じ、来年 5 月には立川市のたましん新本店 1 階に新しい美術館の開館を予定している。地域に根差した活動を活発化し、2 館の両輪で多摩地域の文化芸術の発信拠点の一つとなれたらと願う。

(藤森梨衣・ふじもりりえ)

上原美術館

〒413-0715 静岡県下田市宇土金 341



TEL: 0558-28-1228
FAX: 0558-28-1227
E-mail: info@uehara-museum.or.jp

【開館時間】
午前 9 時から午後 5 時 (入館は午後 4 時 30 分まで)

【休館日】
展覧会会期中は無休

【開館時期】
1983 年 5 月 29 日 上原仏教美術館 開館
2000 年 3 月 16 日 上原近代美術館 開館
2017 年 11 月 3 日 上原美術館としてリニューアル・オープン

大正製薬名誉会長の上原昭二氏が集めた近代絵画コレクションと、その両親である上原正吉・小枝夫妻が収集を始めた仏教美術コレクション。上原美術館はそれらのコレクションをもとにジャンルを越えた二つの美術を楽しむ美術館として、2017 年 11 月にリニューアル・オープンした。

もともと上原小枝氏の故郷である伊豆・下田に、氏の寄付を受けて 1983 年に上原仏教美術館が開館する。2000 年にはその息子である上原昭二氏が自らの絵画コレクションを寄付して上原近代美術館が誕生した。両館は敷地を隣接しながらも異なる財団として運営していたが、上原仏教美術館の施設リニューアルを機に 2017 年より上原美術館 (仏教館・近代館) として一体的に活動を始めた。

仏教館に入ると、はじめに大きな展示空間を有する仏像ギャラリーがあり、近現代につくられた約 120 体の仏像が常設展示される。2017 年のリニューアルでは、その奥にあった建物を全面解体し、新しい展示室や収蔵庫を増改築した。増改築棟への入口は建築構造上、突き当り壁となっていたが、この部分に壁龕のような凹みを作り、来館者を迎える小さな展示スペースとした。長い廊下を進んだ先にある小さなボワイエ (前室) は繰上げ天井の間接照明を施し、自然光をイメージさせる柔らかな光に満ちた空間

となっている。その奥にある展示室はエアタイトケースを備え、安定した美術品保存環境が実現している。ケース照明はケース内を均質に照らすことができる新たな設計を開発し、仏像や古写経が美しく自然に見える環境になっている。この展示室では平安時代の十一面観音菩薩立像や鎌倉時代の阿弥陀如来立像、奈良・平安時代の古写経などのコレクションを展示するほか、伊豆の仏教文化を紹介する特別展も開催している。

近代館は小さな 3 つの展示室からなり、個人の邸宅で絵を楽しむようなホスピタリティの高い空間を目指して設計されている。印象派やマティス、ピカソから日本の近代絵画まで、幅広い絵画コレクション約 300 点より季節ごとにテーマを変えて展示している。

その他、学芸員によるレクチャーや、仏教美術・絵画に関する実技講座、出張授業や授業入館など地元教育機関との連携、専門家を招いての講演会なども行っている。とりわけ 30 年以上続く伊豆半島における仏教文化の調査は貴重な文化財の発見・保護にも繋がっている。上原美術館はこうした活動を継続し、地元の文化振興へ継続的に貢献することを目指している。

(土森智典・つちもりともり)

絹谷幸二 天空美術館

〒 531-0076 大阪府大阪市北区大淀中 1-1-30 梅田スカイビル タワーウエスト 27 階



TEL: 06-6440-3760
 FAX: 06-6440-3762
 E-mail: k-tenku@sekisuihouse.co.jp

[開館時間]

午前 10 時から午後 6 時、金曜日・土曜日・祝日は午前 10 時から午後 8 時 (入館は閉館の 30 分前まで)

[休館日]

火曜日 (ただし、祝日の場合は開館し、翌平日が休館)、
 年末年始、展示替え期間

[開館時期]

2016 年 12 月 23 日

絹谷幸二 天空美術館は、大阪湾を臨む抜群の眺望を誇る梅田スカイビルタワーウエスト 27 階に位置し、積水ハウス株式会社が運営する美術館である。梅田スカイビルは地上 40 階、最上階で 2 棟が連結する独自の形状の高層建築で、世界中の人々が訪れる「空中庭園展望台」で知られている。

絹谷幸二は奈良に生まれ、イタリア留学でアフレスコを学び、帰国後、歴代最年少で安井賞を受賞した洋画 (壁画) 家である。多彩な技法と色彩を駆使したエネルギー溢れる独自の画風を確立し、2014 年には文化功労者に選出される。また、自身の創作活動だけに留まらず、教育活動として若手画家対象の「絹谷幸二賞」の創設に関わり、文化庁の「子供 夢・アート・アカデミー」にも参画する。

この絹谷の幅広い活動・思想と積水ハウス株式会社の芸術文化振興と社会貢献への理念が一致し、2016 年 12 月に絹谷幸二 天空美術館として開館に至った。

館内では絹谷の 1980 年代の代表作から最新作までが展観でき、半年に一度、テーマを変えた特別展示を開催しコンセプトに沿った作品が各展示室の壁面を飾る。特筆すべきは、エントランス部に常設する 180 度ラウンドスクリーンによる 3D 映像である。音響とともに絹谷の世界観を体感頂けるシアターと

して、内外の鑑賞者を魅了している。

その他、館内には絹谷のアトリエも設置されており、ここで絹谷は自ら制作しその過程を披露する。現在進行形で作品が生成する瞬間を 1 人でも多くの子どもたちが間近に見て何かを感じ取ってほしいという願いからである。教育普及活動では地域の小学校の鑑賞教育の場として、また近隣の大学と共同研究の場として連携し、より親しみやすい美術館となるべく活動を続けている。

さらに、月例のイベントとして絹谷の代名詞であるアフレスコの体験が出来るワークショップも開催している。キュレーターによる展示解説を行い、イメージネーションを膨らませた後、漆喰を塗った煉瓦を壁面に見立てアフレスコを体験する。ワークショップを通じて、万人に「想像 = 創造」の楽しさ素晴らしさを実体験させることを大きな目標に掲げている。

100 人いれば 100 とおりの表現があり、個性の輝きがそこにある。「美術・芸術は人々に夢と希望を与える」という絹谷幸二の祈りを結実させるためにも、美術館の責務である「創造力の育成」を活動の原点に位置付けている。

(高橋暁生・たかはし あきお)

奥田元宋・小由女美術館

〒 728-0023 広島県三次市東酒屋町 10453-6



TEL: 0824-65-0010
 FAX: 0824-65-0012
 E-mail: info@genso-sayume.jp

[開館時間]

午前 9 時 30 分から午後 5 時まで
 (入館は閉館の 30 分前まで)

[休館日]

毎月第 2 水曜日 (8 月を除く)、
 年末年始

[開館時期]

2006 年 4 月 15 日

奥田元宋・小由女美術館は、日本画家・奥田元宋 (1912-2003) と人形作家・奥田小由女 (1936-) の夫婦の名を冠した美術館として、2 人の故郷である広島県三次市に 2006 年 4 月に開館した。

日本画の「平面」と人形の「立体」という異なる芸術様式の共鳴、自然と芸術との共鳴を目指し、本市の美術・芸術文化の振興拠点としての役割を担っている。

奥田元宋、小由女夫妻の作品を中心にコレクションし、常設展示室においてその業績を広く紹介している。また、地元ゆかりの芸術家や国内外の優れた美術作品などを紹介する特別企画展覧会も年間に 6 本程度実施している。

建築家・柳澤孝彦 (1935-2017) による独創的な建築も特徴の一つである。奥田元宋作品の重要なモチーフである「月」にちなんで、実際の月を美しく見せるためのロビー設計や「元宋の赤」を彷彿とさせるシンボルツリーのイロハもみじなど、随所にこだわりが盛り込まれた意匠となっている。満月の日には開館時間を夜の 9 時まで延長する取り組みも行っており、ロビーにて開催するコンサートなどのイベントとともに、ゆっくりと観月を楽しめると好評いただいている。(開催日の例外あり)

「市民参加型的美術館」として、美術館ボランティアによる美術館事業への積極的な協力をいただきながら、地域に根ざした活動を続けている。

(吉川昌宏・きつかわ まさひろ)

全国美術館会議の活動は以下の賛助会員各社の支援を受けております。
会員各社のお名前を記して、心より感謝を申し上げます。

アート印刷株式会社	進和テック株式会社
有限会社アート・フリース（大阪美術）	株式会社生活の友社「美術の窓」「アートコレクターズ」
株式会社アート・ベンチャー・オフィス ショウ	一般社団法人全国美術商連合会
株式会社アートローグ	公益財団法人ダイキン工業現代美術振興財団
イカリ消毒株式会社	大日本印刷株式会社
イセ文化財団	株式会社丹青研究所
株式会社印象社	株式会社T Tトレーディング
A G C グラスプロダクツ株式会社	株式会社DNPアートコミュニケーションズ
株式会社NHKエデュケーションル	株式会社東京美術倶楽部
株式会社NHKプロモーション	凸版印刷株式会社
M & I アート株式会社	株式会社トップアート鎌倉
影山幸一（アートプランナー・デジタルアーカイブ）	トライベクトル株式会社
株式会社加島美術	日油株式会社
株式会社学研プラス	日本写真印刷コミュニケーションズ株式会社
カトーレック株式会社	日本通運株式会社
公益財団法人かながわ国際交流財団	ビーブルソフトウェア株式会社
湘南国際村学術研究センター	株式会社美術出版社
株式会社ギャラリーためなが	美術年鑑社 新美術新聞
株式会社求龍堂	株式会社伏見工芸
株式会社キュレイターズ	有限会社丸栄堂
協同組合美術商交友会	ヤマトグローバルロジスティクスジャパン株式会社
株式会社グッドフェローズ	株式会社ユニークポジション
株式会社クレヴィス	読売新聞東京本社
株式会社廣済堂	ライトアンドリヒト株式会社
金剛株式会社	株式会社レンブラント
J O P D 株式会社	早稲田システム開発株式会社
株式会社集英社	（五十音順）

事務局から

報告：第 68 回総会について

企画担当幹事 大越久子（おおこし ひさこ・埼玉県立近代美術館）

2019 年 5 月 22 日（水）・23 日（木）の両日、令和を迎えて初めての総会と理事会が札幌市にて行われました。今回の開催にあたっては、北海道立近代美術館、北海道立三岸好太郎美術館、札幌芸術の森美術館、本郷新記念札幌彫刻美術館の皆様にご尽力いただきました。改めて御礼申し上げます。

22 日午前にホテルライフォート札幌にて開催された理事会では、総会に先立ち、(1) 前年度の事業並びに収支決算報告、(2) 今年度の事業計画案並びに収支予算案、(3) 新規入会申込の正会員・個人会員・賛助会員の審査並びに退会会員の報告、(4) 新役員候補の選任、(5) 一般社団法人化に向けた定款案、(6) 事務局員の就業規則の改正、以上が審議の上、承認されました。

同日午後、同ホテルにて、正会員 139 館、218 名の出席により総会が開催されました。鶴羽佳子北海道教育委員会教育委員と川上佳津仁札幌市市民文化局長の歓迎挨拶、榎本剛文化庁企画調整課長の祝辞の後、嵐田昇北海道立近代美術館長を議長として議事が進められました。平成 30 年度の事業報告並びに収支決算、令和元年度の事業計画案並びに収支予算案、新入正会員並びに個人会員の審査、新規賛助会員並びに退会会員の報告、この 3 議案については異議なく拍手にて

承認されました。新規に正会員 8 館、個人会員 5 名、賛助会員 1 社を迎えた全国美術館会議は、正会員 394 館、個人会員 20 名、賛助会員 52 社で構成される、より大きな組織となりました（5 月末現在）。

また、今年度は役員の改選期にあたることから、理事会から新役員候補者案が提出され、拍手にて承認されました。これを受けて総会は休憩に入り、別室で臨時理事会を開催して、会長、副会長、企画委員長及び企画委員が全員再任されました。なお、根津公一理事（根津美術館理事長兼館長）と原俊夫理事（（公財）アルカンシエール美術財団理事長）の退任に伴い、馬淵明子国立西洋美術館長と内田洋子原美術館長が新たに理事に選任されました。

続いて、全国美術館会議の法人化について議案が提出されました。1952 年の設立以来、断続的に議論されてきた法人化がようやく昨年度の総会で承認されたものの、定款を公証人役場に提出したところ正会員の規定に指摘があり、改めて正会員の定義を審議することになったのです。一般社団法人及び一般財団法人に関する法律の規定に従い、美術館を代表する者（館長）若しくは美術館施設を保有する法人や自治体等が「社員」の資格を持つのですが、何れの立場により社員となるかは各館の判断にまかせること、また、現在の正

会員は簡単な手続きで法人に入会できる特例措置を取る予定であるという事務局の方針が示されました。定款案は現在の全美の規約を踏襲していますが、審議を通じて、もはや美術館が国公私立の枠組みにとどまらず、財団方式や指定管理といった様々な形態で運営されているという現実も改めて浮き彫りになりました。結果として、総会が出された意見を基にした定款案の修正を会長、副会長、事務局に一任し、引き続き法人化に向けて体制を整えていくことが可決されました。事務局では今後、修正した定款案を公証人役場へ提出し、令和2年4月1日に「一般社団法人全国美術館会議」を設立。同月内に入会を募り、5月に第1回総会の開催を目指しています。

続いて災害対策委員会から、「大災害時における対策等に関する要綱」、「大災害時における連絡網実施要領」、「大災害時における援助活動実施要領」の改正案が提出され、承認されました。これは東日本大震災での活動をふまえて従来の要綱等を見直したもので、災害発生時に正会員がとるべき行動や役割がより詳しく具体的に記されています。今後はこの指針を基に、実効性のあるネットワークが作られる見込みです。

報告事項では、8つの部会から、前年度の活動

報告と今年度の活動予定、抱負等が語られました。幹事や部会員の方々の日ごろの活動に、より多くの学芸員が理解と関心を深め、積極的に参画していただければ幸いです。

議案審議と報告の終了後、榎本剛文化庁企画調整課長から、美術と文化財を一体化してミュージアムを継続的に考える審議会の立ち上げや、文化財防災ネットワークの強化等について説明がありました。また、総会後には、佐々木利和北海道大学客員教授による特別講演会「ひとつの列島、ふたつの国家、みつつの文化」があり、アイヌ文化の検証について興味深い視点が示されました。それに続く情報交換会では参加者がにぎやかに交流を深めました。

翌5月23日には、北海道立近代美術館と札幌芸術の森美術館の視察や、歓迎行事の小樽バス・ツアーに希望者が参加したほか、北海道立近代美術館にて小規模館研究部会と地域美術研究部会の会合が行われました。

次回の第69回総会は、京都市美術館を担当館として令和2年5月26日（火）、27日（水）に京都市で開催されます。一般社団法人として初の総会となる予定ですので、ぜひ多くの会員の皆様にご参加いただきますようお願いいたします。



第68回総会会場風景（ホテルライフォート札幌）



第68回総会特別講演会風景

編集後記

『ZENBI』の16号をお届けする。「事務局から」の中でも報告があったとおり、先般の総会で全国美術館会議の一般社団法人化が議論された。法人化の詳細については次号で詳しく解説する予定であるが、かねてからの懸案であった法人化に向けて大きく舵が切られた訳である。当然とはいえ、私たちは美術館という施設が帯びた社会的な責任をさらに強く自覚して職務に励む必要があるだろう。

今回の「全美フォーラム」ではアーカイヴズと画像のパブリック・ドメインという美術館にとって最新の話題について先進的な事例を紹介した。いずれも従来の美術館活動の中では想定されていなかった問題であり、社会のニーズに応えながら美術館が新しいテーマに挑戦する必要をあらためて実感した。折々に報告される研究部会の実践も含めて、本誌では美術館をめぐる新しい取り組みや実験を誌上で紹介していきたいと考えている。

来年のオリンピック、パラリンピックに向けて、美術の分野でも様々な事業が立ち上げられ、国際的な行事も続く。本誌が読者の手元に届く頃にはICOMの京都大会も終了していることであろうが、これについては次号に報告を掲載する予定である。

本誌の最終的な校正をまさに終えようとした時点で大きなニュースが飛び込んできた。あいちトリエンナーレにおける「表現の不自由展・その後」展の展示中止をめぐる一連の問題である。今も事態がめまぐるしく推移しており、単純に論評できる状態ではないが、全国美術館会議としても今後情報を集め、事態を見極めたうえで声明等の対応をとることとなるだろう。この問題に関しても様々な立場から「全美フォーラム」への投稿をお待ちしている。

(O)

『ZENBI』では、 次の要領で広く皆さんからの 原稿をお待ちしています。

[原稿の内容]

- ・展覧会、普及活動など美術館の活動に対する批評を受けつけます。
- ・原則として具体的に対象を限定した批評をお寄せください。
- ・原稿には表題を付してください。

[投稿の資格]

- ・全国美術館会議に所属する美術館博物館の職員であればどなたでも投稿できます。
- ・匿名の投稿は受けつけません。

[投稿に係る詳細]

- ・原稿の形式、許諾、著作権等については投稿規定を参照ください。

[締切]

- ・第 17 号 (2020 年 1 月発行予定) については 10 月 31 日、
第 18 号 (2020 年 7 月発行予定) に関しては 4 月 30 日を締切とします。(当日必着)

[提出先]

〈メールの場合〉

s-osaki@pref.tottori.lg.jp (尾崎) aoyama@ma7.momak.go.jp (青山)

〈郵送の場合〉

〒606-8344 京都市左京区岡崎円勝寺町 京都国立近代美術館内
全国美術館会議機関誌部会 幹事 青山杏子

[問い合わせ先]

内容に関する問い合わせについては下記まで御連絡ください。

〒680-0011 鳥取市東町 2-124 鳥取県立博物館内
全国美術館会議機関誌部会 幹事 尾崎信一郎

ZENBI 全国美術館会議機関誌 投稿規定

1. 全般事項

- (1) 本誌への投稿者は原則として全国美術館会議会員館職員に限る。
- (2) 投稿原稿は他誌（電子媒体を含む）に発表されてないものに限る。
- (3) 原稿（写真を含む）は原則として電子メールで提出すること。
- (4) 原稿は原則として 2,000 字程度とする。

2. 投稿文の採否

- (1) 投稿文の採否、掲載順などは全国美術館会議機関誌部会（以下「部会」という。）に一任とする。
- (2) 掲載が決定した場合は、その旨を投稿者に通知する。

3. 原稿について

- (1) 原稿は原則として常用漢字を用いることとし、である調とすること。
- (2) 引用した文献は、本文中において該当箇所の右肩に順次番号をつけ、その番号を引用順に列挙すること。
- (3) 個人を同定しうる顔写真等を掲載する場合は、本人等の承諾を必ず得ること。
- (4) 投稿文にはできる限り画像の掲載をお願いするが、著作権許諾及び著作権料の支払いが必要の場合は投稿者が責任を持って処理すること。

4. 校正について

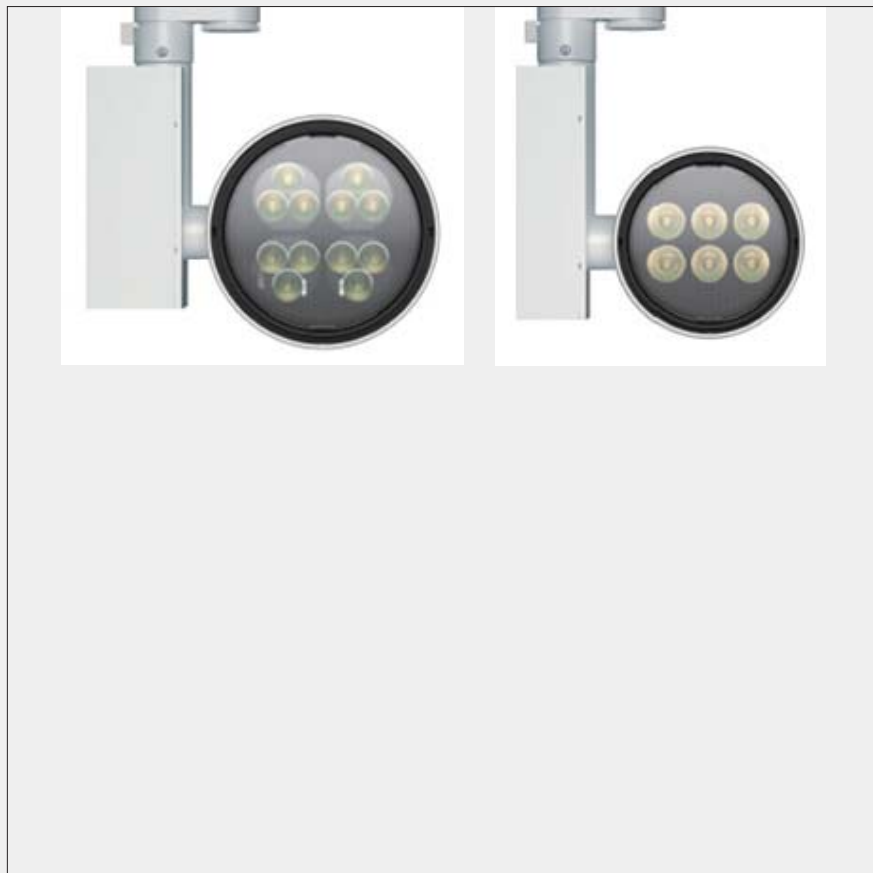
校正については、初校をもって著者校正とする。その後は部会の責任とする。

5. 著作権について

- (1) 本誌に掲載された投稿文の著作権は全国美術館会議に帰属するものとする。
- (2) 掲載後の投稿文について著者自身が活用するのは自由とする。ただし、出典(掲載誌名、巻号ページ、出版年)を記載するのが望ましい。

6. その他

- (1) 原稿料は支払わない。
- (2) 掲載投稿一編につき、本誌 5 部を進呈する。



ERCO Optecは、美術館・博物館の照明に必要な機能と品質を全て持ち、さまざまな展示様式にも柔軟に対応することができるLEDを光源としたスポットライトです。
ERCO 独自開発・製造の最新型光学レンズシステムにより、作品のみをアクセント照明するスポット配光から、壁面を均一に照射するウォールウォッシュ配光、8m超の高天井の空間にも対応する高出力タイプまで幅広く品揃えされており、鑑賞者だけでなく運営者もストレスなく最高の光環境を構築できます。

ERCOでは長年にわたり培ってきた世界中の展示空間における経験をいかして、製品だけではなく、最適な照明ソリューションの提案をいたします。

ERCO

ライトアンドリット株式会社 〒105-0014 東京都港区芝2-5-10 TEL:03-5418-8230 / FAX: 03-5418-8238
※平成27年1月より社名変更いたしました(旧社名:エルコライティング株式会社)。

NISSHA

EMPOWERING YOUR VISION

美術品管理システム Artize MA

NISSHA 独自のアーカイブ構築ノウハウから生まれた
収蔵作品(資料)管理のための高機能データベース

「Artize MA (アルタイズ・エム・エー)」は、NISSHA の高級美術印刷への豊富な取り組み経験やデジタルアーカイブ構築ノウハウから生まれた「収蔵作品管理」「収蔵資料管理」のための高機能データベースシステムです。



豊富な基本機能と柔軟なカスタマイズ

あらゆる美術館・博物館の作品管理業務への対応を考え、豊富な機能を基本パッケージに盛り込みました。個別ニーズに合わせたカスタマイズにも柔軟に対応でき、短期間でスピーディなシステム導入が可能です。

ユーザーごとのアクセス権限を詳細に設定

ユーザー管理画面から利用者のアクセス権限や作品情報の公開・非公開が設定可能。貴重な情報のセキュリティ保持も万全です。

高精細な作品画像を専用ビューアーで閲覧

「Artize MA」に登録された作品画像は、専用の高精細ビューアーで見たい部分を自由に拡大表示できます。

来館者用端末やインターネットを通じて 広く収蔵作品を公開

非常に簡単な操作で、「Artize MA」に登録されている作品情報を、セキュリティを保つつネットワークを経由して公開することができます(インターネット情報発信機能を標準搭載、Web サーバーはオプション)。

日本写真印刷コミュニケーションズ株式会社

<http://artize.nissha-comms.co.jp/>

京都本社(担当: 和田) 604-8551 京都市中京区壬生花井町 3 075(823) 5151

大阪支社(担当: 石濱) 541-0047 大阪市中央区淡路町 1-7-3 日土地堺筋ビル 06(6232) 2714



丸栄堂

美 術 商

日 本 画 ・ 洋 画 ・ 工 芸

代表取締役 浅木正勝

〒101-0021 東京都千代田区外神田 5-4-8

TEL. 03-3831-7821 FAX. 03-3831-7771

<http://www.marueido.com>

IPMを取り入れた保存環境づくりと
虫・カビの防除で文化財を守りましょう。



調査・診断

- ▼博物館・美術館・図書館・寺社等の環境調査
- ▼調査セットによる環境調査
- ▼昆虫や微生物の同定
- ▼生物の被害調査・診断

資格・認定



- ▼文化財虫菌害防除作業主任者
- ▼文化財IPMコーディネータ
- ▼文化財虫菌害防除薬剤等認定

コンサルティング

- ▼保存環境・防除薬剤

防除処置

- ▼殺虫・殺菌処理の受託
- ▼燻蒸効果判定



研修・普及



- ▼文化財の保存に関する研修会・講習会
- ▼図書の出版

公益財団法人 文化財虫菌害研究所

〒160-0022 東京都新宿区新宿二丁目1番8号 新宿フロントビル6F

TEL 03 (3355) 8355 FAX 03 (3355) 8356 www.bunchuken.or.jp